

党派を超えて国家的課題を追求する

公益財団法人協和協会

時代を刷新する会

両団体会長代行 岸 信 夫
両団体理事長 半 田 晴 久
新エネルギー委員長 中 島 稔
両団体専務理事 清 原 淳 平

新エネルギー委員会のお知らせ (第338回)

日 時 令和元年11月6日(水) 午後1時半～4時

場 所 参議院議員会館 地下1階 B105会議室

千代田区永田町2-2-1

◆国会議事堂前駅(丸の内線・千代田線)①番出口より5分、永田町駅(有楽町線・半蔵門線)①番出口より下車2分。当日、午後1時より、議員会館玄関にて、通行証を差し上げます。その時刻前に到着された方は、恐縮ですが、受付脇のロビーにてお待ち下さい。また、会議開始後にお越しの方は、受付に「B105会議室に行きたい」旨お伝え下されれば、お迎えに参ります。

議 題 1、最近の再生・新エネルギーについて想う

挨拶 中島稔新エネルギー委員長

2、振動から電気を生み出す環境発電について

解説 山根大輔東京工業大学科学技術創成研究院助教

3、『新エネルギー関連ニュースNO.189』

解説 中島稔新エネルギー委員長

報 告 去る10月2日開催の第337回新エネルギー委員会は、中島稔新エネルギー委員長が議長を務め行われました。

はじめに、中島委員長より、「最近の再生・新エネルギーについて想う」と題して開会挨拶がありました。よくあるビジネスプロパガンダとして、例えば日本が得意とするハイブリッド車は廃れ、電気自動車が普及するという説がある。確かに電気自動車はCO2削減に多少役立つが、現在の電気自動車の販売価格を考えれば、すぐに電気自動車の販売台数がハイブリッド車を上回るとは到底考えられない。また、テスラ製の電気自動車が発火した事例があるように、安全性においても解決すべき課題がある。つまり、このような記事が出るのは、記者

の勉強不足もあるが、中国によるビジネスプロパガンダと見るべきなのだ。

次に、清原淳平専務理事より、松下祥子東京工業大学准教授の経歴紹介がありました。次に、松下准教授より、「新しい熱エネルギーの利用法：増感型熱利用発電」と題して解説をいただきました。熱からエネルギーを生み出す方法としては、地熱発電があるが、水を介するので効率が悪い。温度差発電は、構造が複雑なのが難点である。温度差がなくても熱エネルギーを直接電気に変換できる方法を模索した。そこで、色素増感型太陽電池が、光で励起するのであれば、熱でも励起するのではないかと考え、薄型の電池を80℃の水槽に入れ、放電テストを行ったところ、70時間の継続放電が確認できた。また、80℃の水槽にそのまま放置しておくと、10時間で発電性能が復活した。そのサイクルを25回繰り返すことも確認した。今までは200℃以上の高温が必要だったが、80℃という低温で成功したことが成果である。現状、断続的にしか電力を得ることができないため、IoTセンサー用への利用が現実的だ。今後は発電所に薄型電池を敷き詰め、排熱で自家発電を行う構想を持っている。

まず、中島稔委員長より『新エネルギー関連ニュースNo.188』の解説がありました。今回は、○太陽光で作った水素をオーストラリアから日本に運搬して利用する実証実験に成功。運搬に適したMCHを製造し、運搬した。○靱殻から電極製造技術。未だ野焼きを行っている発展途上国にも広げたい考え。○経産省、水素・燃料電池戦略ロードマップを策定。技術開発を促進し、水素を動力としたシステムを1000万台、水素ステーションを1万カ所に整備する。○水素関連市場は10年後におよそ50倍以上成長するとの予測。○次世代型太陽電池の研究活発化。○秋田で二基目の地熱発電所着工。5年後の運転を目指す。○食品廃棄物を原料としたバイオマス発電所。などの解説があり、一同大いに勉強になりました。

★レクチュアにつき、当日会費 会員千円にご協力を。

次回、11月6日(水)の新エネルギー委員会に

出・欠 (いずれかに○印)

御芳名 _____

貴方様のFAX _____

テロ対策への警備からの要請上、会員に限ります。

非会員で参加希望者は、2日前までに履歴書をご提出下さい。

(その際の会費は二千円となります。)

事務局宛FAX 03-3507-8587

協和協会事務局 ☎03-3581-1192 時代を刷新する会事務局 ☎03-3272-4320

HP <http://www.jidaisassin.jp> Eメール kiyohara@jidaisassin.jp

当日連絡先 080(8836)6203 (重田) 080(9292)2620 (高津)